

4 トドロフの構造主義

林 美 樹

ツヴェタン・トドロフの構造主義はソシュールの言語学をモデルに一般記号学となり得る物語の「普遍文法」を構築することである。すなわち、記号同志の形式的関係を扱う統語論、記号と指示対象の関係を扱う意味論、記号とその使用者の表現関係を扱う語用論の三部門⁽¹⁾を雛形として、文学研究の領野を三つの相（統語論相、意味論相、語辞相）に区分して研究するものである。⁽²⁾——統語論相ではテキストの構造を、意味論相では意味の発生の一般条件を、語辞相では言語メッセージの提示方法である文体や語りの様態を研究するのである。つまり、言語学を枠組みにすることで、演繹的論理的に整合性のある構造——解釈行為を発生させる一般法則（＝詩学）を導き出そうとしている。

ところが、『デカメロンの文法』⁽³⁾では統語論相を考察の対象としたために、作品の形式性を重視して記号の記号表現的側面^{シニフィアン}だけを探る結果になっている。記号表現と記号内容^{シニフィエ}の均衡が破れて記号表現に優位がおかれている。だから、『デカメロンの文法』では作品の内容が欠落して筋の表面的な客観性の記述だけにとどまっている。作品が筋に還元されたために『デカメロンの文法』は単なる作品の説明となっていると言ってもよい。結果として、この分析結果はその作品が単に記号の体系の記述にすぎないことを明示しているだけである。

ボッカッチョの『デカメロン』という文学作品が記号の体系であるという分析の結果は文学が言語一般と何らかわりがないということである。それ故に、この文学批評は文学の「文学性」を不問に付しているし、また逆に、「文学批評とは何か」という問いを突きつけていると言っても過言ではない。

しかしながら、トドロフは詩学をさらに追い求めることでこの問いかけを回避していく。——トドロフの目的が物語の普遍文法を得ようとするところから、回避しても当然なのかも知れない。トドロフは作品そのものの構造より

も文学総体と個々の作品との中継点となるジャンルの構造に焦点を移していくのである。この結果誕生したのが『幻想文学』というジャンル論である。

トドロフは『デカメロンの文法』のように統語論相のみをその中で扱っているのではない。ジャンルの意味論相や語辞相も取り扱っている。何よりも刺激的なことは記号の解釈者である読者を幻想文学の定義に引き入れて幻想というジャンルの構築化を試みていることだ。

「テキストが読者に対し、作者人物の世界を生きた人間の世界と思わせ、しかも、語られたできごとについては、自然な説明をとるか超自然な説明をとるか、ためらいをいだかせなければならない」⁽⁴⁾ というのが幻想の定義である。それはまた「読者がテキストに対し特定の態度をとること」⁽⁵⁾ を強要するとトドロフは述べている。

トドロフはジャンル概念が「テキストとの出会いにおいて読者を導く規範ないし期待の念である」⁽⁶⁾ ことをその定義の中に明示したのである。また同時に、「(幻想のジャンルが与える) 期待の念や読みの方法が解釈過程を導き出すと同時に、受容し得る、もっともらしい読みの方向に厳密な限界を押しつけている」⁽⁷⁾ ことも明らかにしている。

ジャンルとは文学総体と個々の作品とをつなぐ単なる中継点ではない。その概念は同時に構造主義的分析から解釈へと至る中継点でもあるのだ。『幻想文学』の中でトドロフは記号の解釈者である読者を介在させることでジャンルから構造主義的分析へとその道を逆に辿っているのである。すなわち、「構造主義的分析が終わるところから解釈が始まる」⁽⁸⁾ その瞬間に読解行為^{レクチュール}に方向性を与えるジャンル概念にトドロフは読みの可能性を求めたのである。

『デカメロンの文法』も『幻想文学』もともに文学の理論化を指向している。両者の相異点は、前者が言わば書き手のテキスト構成の技法に終始しているのに対し、後者は読者の登場によって読み手の読み方や反応を重視していることである。『幻想文学』はジャンル概念と読解行為との間にある関係を示した点で評価できると思う。

〈註〉

- (1) Charles Morris の記号論をもとにしている。チャールズ・モリス著『記号と言語と行動』寮金吉訳 三省堂, 1976. p. 251. ただし pragmatics には語用論, syntactics には統語論の訳をあてている。
- (2) Tzvetan Todorov, *Grammaire du Décaméron*, (The Hague: Mouton, 1969), p. 18. ツヴェタン・トドロフ『幻想文学』三好郁朗訳 朝日出版社, 1974. p. 33. ツヴェタン・トドロフ「詩学」松崎芳隆訳 フランソワ・ヴァール他著『構造主義』佐々木明他訳 筑摩書房, 1978. 所収. p. 103.
- (3) アンジェロ・マルケーゼによる『構造主義の方法と試行』を参照している。アンジェロ・マルケーゼ『構造主義の方法と試行』谷口勇訳 創樹社, 1981. pp. 284-331.
- (4) ツヴェタン・トドロフ『幻想文学』三好郁朗訳 朝日出版社, 1974. p. 53.
- (5) 同上, p. 53.
- (6) Jonathan Culler, *Structuralist Poetics: Structuralism, Linguistics and the Study of Literature*, (London: Routledge and Kegan Paul, 1975), p. 136.
- (7) *ibid.*, p. 127.
- (8) Frank Kermode, *The Genesis of Secrecy on the Interpretation of Narrative*, (Cambridge: Harvard U. P., 1980), p. 41.

5 構造主義の興亡

進藤 鈴子

20世紀における一つの思想として、構造主義の果たした役割を過大評過しすぎるということはない。それは単に文学一般ではなく、あらゆる人間科学に深い影響を与えたからである。その起源となるのは、ソシュールの言語学であるが、そこには、言語に対する新たな覚醒というものがあつた。つまり、「言語機能と思考過程に対する新たな覚醒が、人間の普遍性という事実を発見させたのである。」⁽¹⁾ そこから、19世紀から20世紀にかけて蔓延していた学問の個別化という現象から、全体としての学問、相互関連する学問へと進展したのである。